彦根市埋蔵文化財調査報告書　第３３集

天田遺跡　Ⅰ

－河瀬土地改良区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書－

平成１５年３月
彦根市教育委員会

序

本報告書は、団体営ほ場整備事業に伴い発掘調査を実施しました天田遺跡の調査報告書です。

河瀬地区のほ場整備事業は、本市における多くの遺跡の発掘調査のきっかけとなり、この地域の歴史の一端を垣間見ることとなりました。すなわち、この地域で発掘調査により遺跡の実態が判明した多くが古墳時代からはじまることや、少数の遺跡ではあるものの、極少量の縄文時代の遺物を出土すること等であります。このことは、今後この地域の歴史を知るうえでの手がかりとなると考えます。

このような資料が集まり、一つの歴史が明らかになっていくものでありますが、調査のきっかけとなりましたほ場整備事業もまた、長い歴史の中では自然に対する人々の働きかけという意味において歴史の一こまになるものであります。

遺跡は、自然に人間が働きかけた成果を留めているもので、厳密な調査を行えば歴史的な事象が結果としてわかるものであり、現代の私たちには過去を知る貴重な資料となるものです。このような意味で、この調査報告書が歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にご理解とご協力をいただきました河瀬土地改良区の皆様をはじめ、関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

平成１５年３月

彦根市教育委員会
教育長　矢田　徹

例　　言

1．本書は、彦根市極楽寺町に所在する天田遺跡の発掘調査報告書である。

2．天田遺跡は、河瀬土地改良区が実施する団体営ほ場整備事業に伴い、文化庁および滋賀県教育委員会の補助を受け発掘調査を実施した。

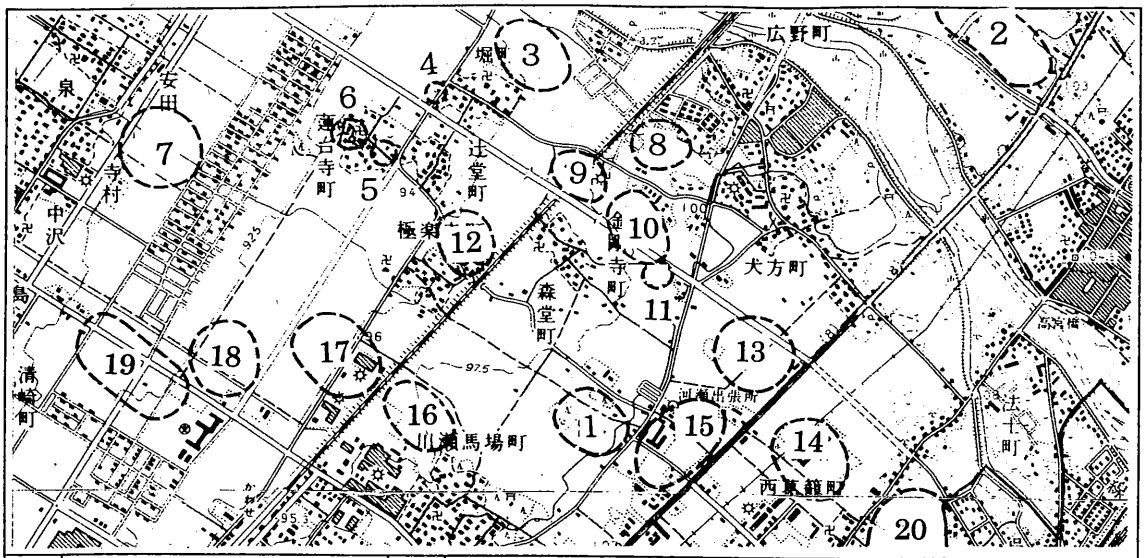
3．本調査の事務局は次のとおりである。

彦根市教育委員会事務局文化財課

課長	花木　勉	文化財係長	本田　修平
課長補佐	三浦　顕	同係主査	川村　太志
副主幹	尾﨑　洋	同係員	森下　雅子

4．本調査で出土した遺物等の資料は、本市教育委員会で保管している。

5．本書で使用している図版の北は、磁北である。



1	天田遺跡	2	丁田遺跡	3	門田遺跡
4	堀城遺跡	5	蓮台寺城遺跡	6	蓮台寺遺跡
7	寺村遺跡	8	横地遺跡	9	石原遺跡
10	堀南遺跡	11	神ノ木遺跡	12	辻ノ東遺跡
13	段ノ東遺跡	14	葛籠北遺跡	15	極楽寺遺跡
16	西海道遺跡	17	杉田遺跡	18	鶴ヶ池遺跡
19	馬場遺跡	20	法士南遺跡		

遺跡位置図

1．はじめに

①　位置と環境

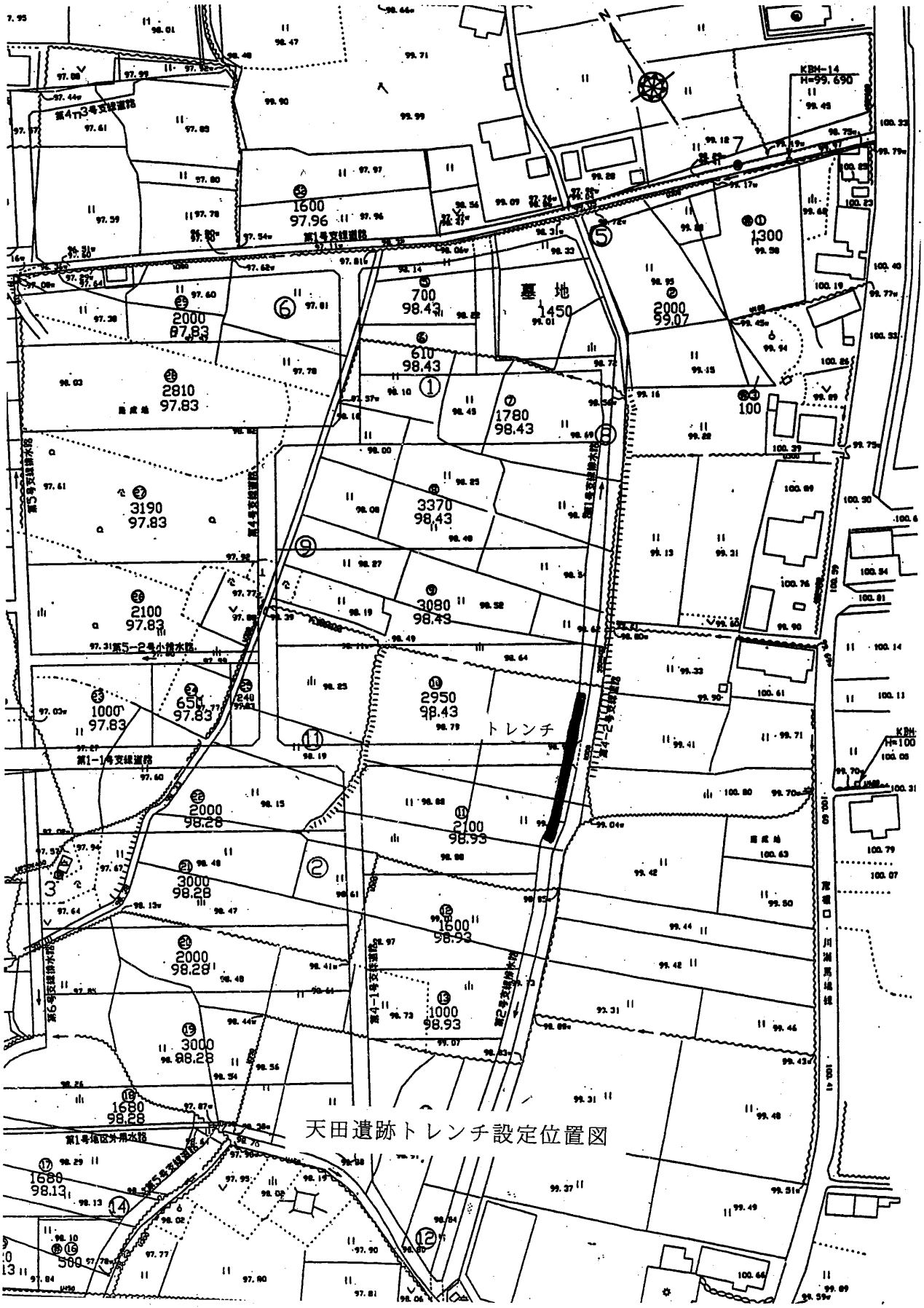
彦根市は、琵琶湖の東北部に位置し、鈴鹿山系を源とする芹川、犬上川、宇曽川が市内を横断して流れ、琵琶湖へと注いでいる。

天田遺跡は、犬上川左岸の扇状地から沖積地への移行する地形に位置している。この付近は、ほ場整備事業の実施によって景観が変わってしまっているが、以前は田の中に小さな樹林が処々に残る風景を成していた。

天田遺跡の所在する極楽寺町は、JR 河瀬駅東約１km の田園地帯に所在し、やや段差のある田が東から西へと向かって広がっているが、以前は用水の確保が困難であったとのことである。天田遺跡は、この極楽寺町から JR 琵琶湖線を東側に超えた田の中に広がっており、遺物の散布地であること以外は詳細が不明な遺跡であった。

旧中山道、国道８号線、JR 琵琶湖線は、２km ほどの間に並行して通っているが、この旧中山道から JR 琵琶湖線の前後にかけては彦根市内でも遺跡が集中して所在するところである。現在知られている遺跡の内容から見れば、その大半が古墳時代後期から始まるものであり、この地域における歴史的な画期の一つとして挙げることが可能であると考えられる。

具体的には、昭和６０年から６１年にかけて彦根中学校建設時に発掘調査を実施した葛篭北遺跡で、封土が削平された直径２０m前後の小円墳が６基確認でき、主体部が検出で



天田遺跡トレンチ設定位置図

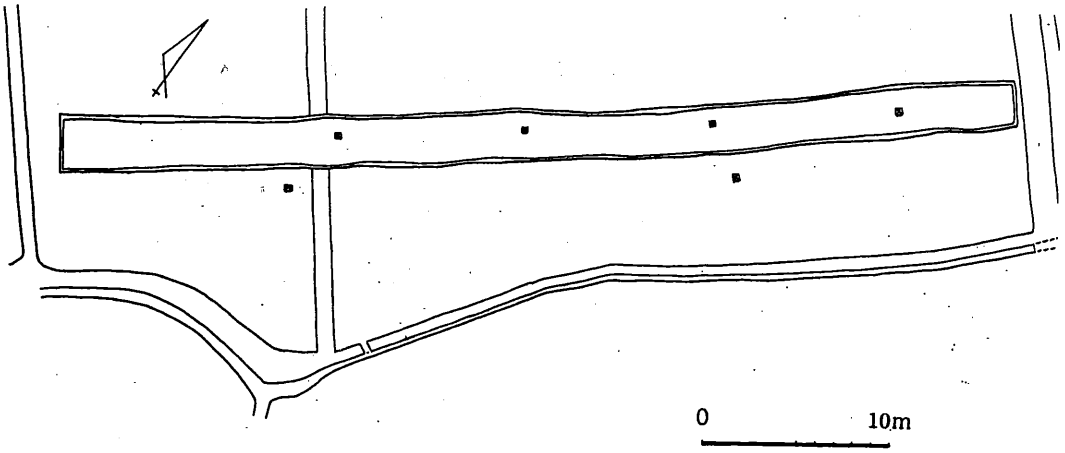
トレンチ全景

きた円墳では須恵器と鉄剣を副葬した木棺直葬墳であることが確認できている。このような小円墳の出土状況は、この地域の後期群集墳の一つのあり方を示しているものと考えられる。

また、時代は前後するが、縄文時代の後期から晩期のかけての遺物が極少量ながら出土することも注目にあたいすることで、この付近の遺跡で言えば、神ノ木遺跡で縄文時代後期の土器が出土し、南川瀬南遺跡では縄文時代晩期の土器が出土している。いずれの遺跡にしても、復元可能なものが出土していることから、流れ込みによるものとは考えにくく、極短期間（キャンプ地的な遺跡のあり方を示していると考えられる）の遺跡であったと考えることが妥当であるものと思われる。

この地域は彦根市内でも以上のような特徴的な遺跡のあり方を示す地域であり、立地する条件の中でこのような特徴を示す遺跡が形成されたものと考えられる。現況の風景は田が一面に広がるものであるが、地元の人の話を聞けば、以前は旧中山道からこの地域にかけては桑畑が多く有ったとのことであり、地理的には犬上川が形成した扇状地から沖積地に入る先端部であったものと考えられ、水田を開くほどは水の便が良くなかったものと思われる。

今回の天田遺跡の発掘調査は、平成７年度から進められている河瀬地区のほ場整備事業に伴って実施したものであるが、遺跡の現状は、田面で須恵器等の遺物片が多く散布していることから、遺跡の本体に当たる可能性が高いと考えられていたものである。



設定トレンチ図

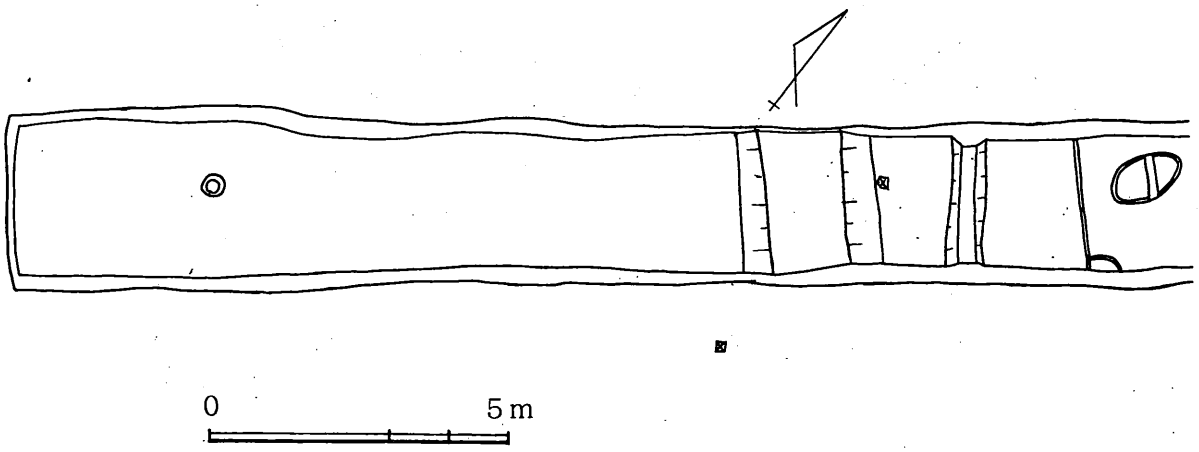
2．発掘調査の方法

天田遺跡の所在する河瀬地区の団体営ほ場整備事業は、平成１４年度事業としては、河瀬小学校前の西側が予定地であった。今回は、その設計の関係から耕作土はあまり出ないとのことであり、予定地内の移動で対応するとのことが基本方針で、切り盛りは最小限にとどめるとされていた。このため、実際に掘削工事が予定されている区画では、２ｍほどの幅で掘削される排水路が主なものになるとのことであったため、発掘調査の中心は排水路予定地とした。

天田遺跡は、発掘調査の開始に先立ち現地を歩いた結果、須恵器片等が多数表採できる遺跡である。このため、本調査にかかる以前に試掘調査を実施した。この試掘調査は、重機にて約２ｍ×３ｍの試掘トレンチを設定して実施し、遺構や遺物の包含層の状態を確認したものである。

試掘調査の結果、遺構等が期待できた墓地付近の調査では遺構面や包含層等は確認できなかったが、この墓地のある地域から現況の用水路である幅１ｍ程の小川を越えた西側の田でピット等の遺構が確認できたため、この地点で排水路予定地に沿ってトレンチを設定し発掘調査を実施することとなった。

設定したトレンチは、結果的に幅２ｍで長さ約５０ｍの規模となった。



トレンチ南側平面図

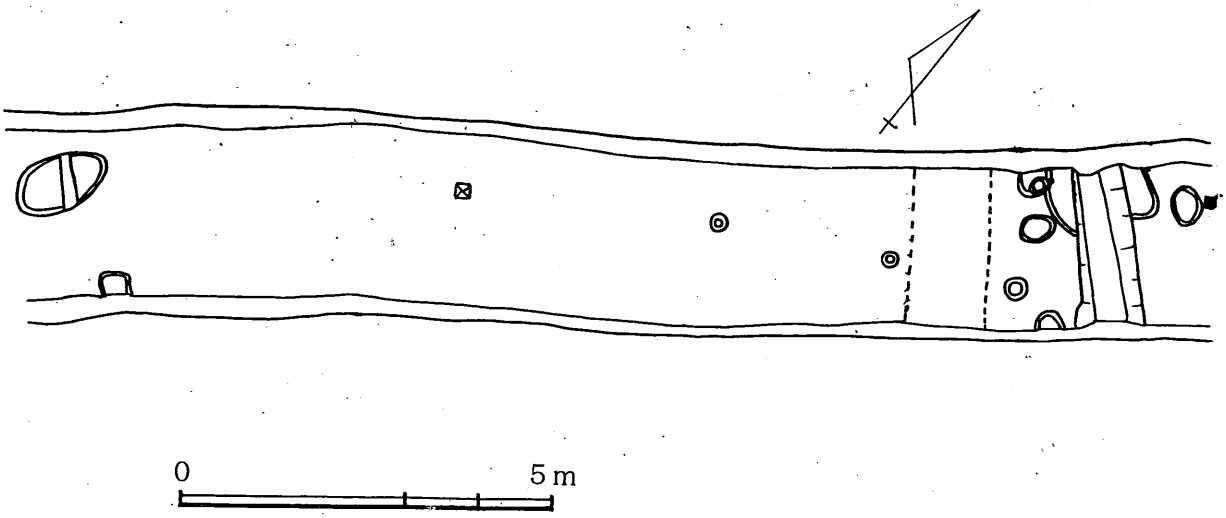
3. 調査結果

本調査として設定したトレンチは、前述したように幅２ｍで長さが約５０ｍのものであったが、全体の土層の概略を記せば、３０cmから４０cmの耕作土層があり、その下第２層に１０cmから２０cmの黄褐色粘質土層の床土が存在する。遺構面は、この下の第３層褐黄色粘質土層から検出した。

トレンチの東端は、現況の水路が流れており、この水路の西側に８０cm ほどの畦道があるため、この畦道を避けて水路からほぼ２m離れたところからトレンチを設定した。このトレンチの東壁から１ｍほどのところで径約７０cm の黒色土が入ったピットを２ヶ所確認したため、トレンチ全体は、ほぼこのレベルで遺構面までの掘削を行ったものである。

この掘削で確認できた遺構は、トレンチ北端のピットおよびトレンチ南側で確認したピットや溝であった。このトレンチ両側で確認したピットや溝の他には、トレンチ全体に土壙やピット状のよごれがあったが、輪郭が明確に確認できなかったため、この地域を中心に遺構の精査を集中的に行った。最終的には、20cm ほど人力で削り込み遺構の検出を行った。この過程で土師器や須恵器等の遺物の出土を見たが、その大半は古墳時代から奈良時代にかけての遺物であった。

調査の状況は以上のようであったが、以下にトレンチの状況を述べるが、約５０ｍと長いため、地域を区切って記述する。



トレンチ中央部平面図

<トレンチ南側>

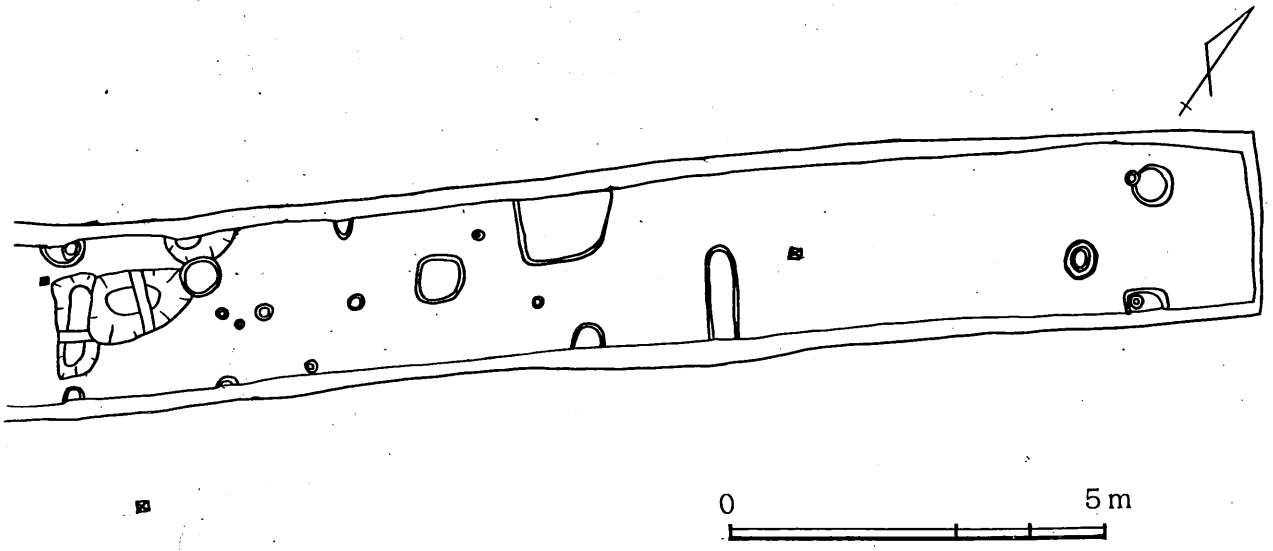
全長約５０ｍのトレンチは、２枚の田にわたって設定したものであり、北側の用水路から南側の用水路までを地形に沿って結んだ形になるものである。このため、トレンチは、やや屈曲した形のものになった。

トレンチ南側は、用水路から約２ｍの距離をおいてトレンチ端としたが、このトレンチ端から現在の畔までをトレンチ南側として調査状況を報告する。

トレンチ端から南側約２ｍは、耕作土・床土の下の第３層が砂利混じりの砂層となるが、この砂層から茶褐色粘質土層に変わるトレンチ端からほぼ３ｍの所で径約４０cm・深さ約２０cm の暗茶色粘質土が入ったピットを検出した。ただし、ピットは、周囲を精査したが１基のみであり、出土遺物も無かったため、その性格および年代は不明である。このピットより約９ｍ北に黒褐色の幅 120cm ほどの土塁状の高まりがあったが、現況の畔と重なることから、一時期前の田の畔と考えられる。

<トレンチ中央部>

トレンチを設定した北側は、現況では一枚の田となっていたが、遺構を検出する過程で現状の田の畔より約１３ｍ北側に黒褐色で幅 100cm ほどの土層を検出した。畔で確認した結果、この土層は耕作土の直下より土塁状に作られていたもので、トレンチ南側で検出し



トレンチ北側平面図

た一時期前の田の畔と同様なものであることを確認したもので、ある時期に２枚の田を１枚にしたものであったと考えられる。

この地域で検出した遺構は、南側畔の２m北側で幅 200cm の溝（ＳＤ－２）を検出した。この溝は、黒茶色の土が入ったもので、掘り込みを行った結果、北側の溝端より 150cm の間は５cm ほど下がるだけで、溝の本体は幅 60cm、深さ１５cm ほどのものであった。出土した遺物は、若干の土師器・須恵器片であった。

溝の北側で検出した土壙（ＳＫ－６）は、長径 130cm、短径 80cm の楕円形をしたもので、深さは 15cm であった。この土壙からも須恵器が若干出土している。また、溝と接してトレンチ東壁で１辺 50cm の四辺形のピットを検出しているが、土師器の高坏脚部が出土している。

この他、北側の畔跡まで数箇所でピットを検出しているが、トレンチ中央部は輪郭のはっきりしない土のよごれがあり、人力で遺構面の精査を行った結果、古墳時代から奈良時代までの土器等が出土したが、明確な遺構は検出できなかった。この結果を考えれば、この地域の遺構面のよごれは、奈良時代以降にこの面が整地され、整地をまぬがれた深い遺構だけが残っていたものと考えられる。

<トレンチ北側>

トレンチ中央部北側で検出した畔跡よりトレンチ北端までの地域で、試掘調査時に検出

遺構検出状況（南から）

したピットを含む地区である。

この地域も、トレンチ北端で検出した３基のピット以外は輪郭が明確でない遺構状のよごれが広がっていたことにより、人力による遺構面の精査を繰り返し実施した地区である。

この結果、溝や土壙等の遺構が確認できたもので、以下に主な遺構について記述する。

畔跡の１m北側で幅 70cm、深さ 25cm ほどの溝（ＳＤ－１）を検出している。この溝は、暗茶色の土が入っていたもので、須恵器等の遺物が出土している。また、この溝の周囲で溝に切られた土壙（ＳＫ－５）やピットを検出している。この溝の１m北側では３基の土壙およびピットが一部切りあった形で検出した。また、この地点からトレンチ北端のピットまではピットや土壙を検出しているが、ピットについては、その並びに規則性が確認できなかったことより、現状では掘建て柱の柱穴等その性格を把握することは出来なかった。また、土壙についても性格を把握するに至っていない。

トレンチ北端の３基のピットは、北端で並ぶ２基については中に入っていた土が黒褐色であり、他の１基は暗茶色であった。また、遺構の掘り込みを行ったところ、北端のピット（Ｐ－１）からは、極小片ではあるが、平安時代の黒色土器が出土しており、他の遺構と若干の時期差があったことが確認できた。このことから考えれば、この２基のピットは今回の発掘調査で確認した遺構の時代的な下限を現しているものと考えられる。また、輪郭が明確でなかった遺構は、精査時の遺物の出土状況から考えれば、奈良時代以降平安時代までの間に古墳時代から奈良時代の遺構面が削平されて整地されたものと考えられる。その結果、トレンチ全体で当時の地形の凹凸に沿って整地層の厚さが変わっていたことや、

遺構掘込状況（北から）

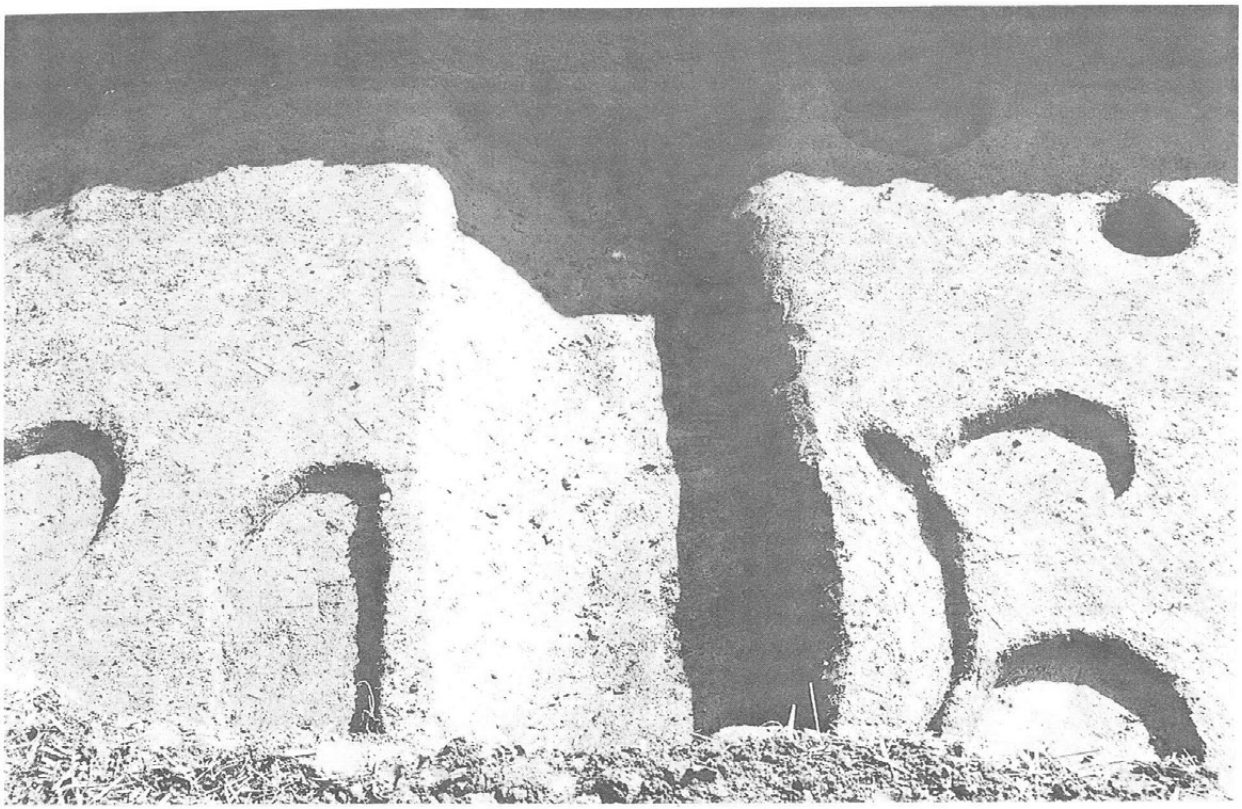
や、遺構は、深い部分だけが残存したこと等が考えられる。

4．まとめ

天田遺跡は、今回のほ場整備予定地のほぼ全体にわたって現況の田面で須恵器等の遺物が表採できる散布地であった。また、天田遺跡が所在する周辺地域は、古墳時代以降の遺跡が密集する地域であり、彦根市内でも注目される地域の一つであったが、今回の発掘調査によって、天田遺跡の一端が明らかになったものと考えられる。

すなわち、天田遺跡は、その出土遺物より若干の古墳時代前期の遺物を出土することから、遺跡の始まりは古墳時代前期まで上がるものと判断できた。しかし、遺跡の中心的な時代は、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであると考えられる。ただし、奈良時代から平安時代までのある時期に遺構面が削平を受け整地され、今回の発掘調査で検出した遺構の状態が作られた。このため、今回検出した遺構の状態からは、ピットの存在から遺跡の性格が集落跡であったものと考えられるが、柱が規則的に並ぶ等や竪穴住居跡の検出等はできなかったことにより、その確証は得られていない。

しかし、遺跡の時代を明確にできたことにより、以前から考えられてきたこの地域の本格的な開発が、古墳時代であったことの一つの資料として貴重な資料であり、彦根市の地域史的な歴史を考える資料として位置付けができるものと考える。



遺構（SD－１）掘込状況

遺構（P-1～P-3）掘込状況

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいせい１４ねんど　しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
遺 跡 名	天田遺跡
副 書 名	河瀬地区土地改良区ほ場整備事業に伴う天田遺跡発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	彦根市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第３３集
編 著 者 名	
編 集 機 関	彦根市教育委員会
所 在 地	〒５２２-0001　彦根市尾末町１番３８号
発 行 年	平成１５年３月

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天田遺跡	彦根市極楽寺町地先	彦根市		35°13′40″	136°14′14″	20021216～20030331	約 100 ㎡	団体営ほ場整備事業に伴う

収録遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
天田遺跡	集落跡	古墳時代	溝、ピット等	古墳時代～奈良時代の須恵器、土師器	遺物は、平安時代等に整地した層から出土

彦根市埋蔵文化財調査報告　第３３集

平成１４年度　市内遺跡発掘調査報告書
（河瀬土地改良区ほ場整備事業に伴う天田遺跡発掘調査）

平成１５年３月

編集　彦根市教育委員会
発行　彦根市教育委員会